

と夢中^{むちゆう}で答えた。しばらくして、行先はアメリカときまつた。健次郎の望むところであつた。このころ、日本の政府は、外国の新しい学問やすぐれた技術^{きじゆつ}をとり入れるため、優秀な若者を、どんどん外国に留学^{りゆうがく}させていたのである。

すぐに、出発の準備^{じゆんび}にとりかかつた。貧^{ます}しい健次郎に十分な準備ができるはずもなかつたが、知り合いの人びとの世話で、洋服を作ってもらつた。それは、洋服か和服かわからないような変な服だつた。もう一つ、靴^{くつ}を買わなければならなかつたが、まだ靴屋がない。これも、友人が、外国人の白い古靴^{ふるくつ}を買つて来てくれた。はいてみるとだぶだぶだつた。とにかく、こうしてなんとかまにあわせて、横浜港を出帆^{しゅっぼん}したのが、明治四年（一八七一）一月一日だつた。船の名はジャパン号。健次郎が十八歳のときである。新しい学問を学べるうれしさに、健次郎は胸をふくらませた。

太平洋上を十日あまり走つたある日、